

氏名	井野 恭子 (学籍番号 10D001)		
学位の種類	博士 (看護学)		
学位記番号	第 4 号		
学位授与年月日	2015 年 9 月 18 日		
論文題目	経済連携協定で来日した外国人看護師と日本人看護師の 協働プログラムに関する研究		
論文審査担当者	委員長	市江 和子	教授
	委員	渡邊 順子	教授
	委員	藤井 徹也	教授
	委員	森 一 恵	教授

論 文 要 旨

1. 研究の背景と意義

日本の医療現場には、経済連携協定 (Economic Partnership Agreement、以下 EPA と略す) に関連して 740 人を超えるフィリピン人、インドネシア人の外国人看護師候補生が就労し、2012 年 3 月末現在、フィリピン人 15 人、インドネシア人 51 人、合計 66 人の外国人看護師が合格している。これまでの日本の医療現場には外国人看護師の導入はほとんどされておらず、外国人看護師を対象にした先行研究も EPA による外国人看護師を対象としたものではない。本研究は、EPA で来日した外国人看護師を受入れている医療施設を対象に、外国人看護師の就労実態を調査し、日本の医療施設で外国人看護師と日本人看護師が協働するための知見を得る。

2. 目的

EPA で来日した外国人看護師と共に働く日本人看護師の実態を基に、看護の目標を共有し、ともに力を合わせて活動するための協働プログラムを検討する。

3. 研究方法

第 1 研究は、第 99 回から第 101 回看護師国家試験に合格した外国人看護師が勤務する 48 の全施設の外国人看護師 65 人を対象に、看護基本技術 39 項目に関する質問紙調査をした。分析は単純集計、SPSS for Windows 19.0J による Mann-Whitney の U 検定、看護基本技術の実施率の比較は js-STAR 2012 を用いた。第 2 研究は、第 1 研究の外国人看護師 65 人と働く日本人看護師 201 人を対象に、外国人看護師の実施状況を第 1 研究と同様の 39 項目の質問紙で調査した。分析は単純集計、および第 1 研究の結果との差異を SPSS for Windows 19.0J による Mann-Whitney の U 検定を行った。第 3 研究は、外国人看護師 3 人と、ともに働く日本人看護師 9 人を対象に 5 つの Step の協働プログラムを実施し、Step 1 と Step 5 における外国人看護師の看護技術の実践状況に関する質問紙調査と、Step 2 と Step 5 による外国人看護師と日本人看護師の協働の認識を半構成的面接で調査した。分析は Step 1 と Step 5 では単純集計および差異の有無を SPSS for Windows 19.0J による Mann-Whitney の U 検定を用い

た。Step 2 と Step 5 の半構成的面接のデータを KH Coder を用いて計量的テキスト分析し、高頻度抽出語および共起ネットワークによる比較をした。本研究は、所属機関の倫理委員会の承認を得て実施した。

4. 結果

質問紙調査の有効回答率は、第 1 研究は協力の得られた 30 施設 41 人のうち 31 人 (75.6%)、第 2 研究は 201 人のうち 139 人 (69.2%) であった。第 1 研究の看護技術の実践状況について外国人看護師は、生活援助技術はひとりで実施していたが診療の補助技術の実施率は低かった。外国人看護師の母国の実践との比較では、母国の実施率が高く、新卒日本人看護師との比較では新卒日本人看護師の実施率の方が高かった。第 2 研究でともに働く日本人看護師から捉えた外国人看護師の看護技術の実践状況は、外国人看護師の実態と日本人看護師の認識は一致した。第 3 研究では協働プログラムの Step1 および Step5 の看護技術の実践状況に変化がなかった。協働プログラムの Step2 および Step5 の外国人看護師の半構成的面接では、「看護」の抽出語が Step2 では 3 が Step5 では 20 に増加し、Step2 の共起ネットワークでは外国人看護師は「日本語の記録や仕事に忙しいと感じ」、「自分に自信がなく」、「日本人とはケアを通じて関係するが、その結びつきは弱い状態」であった。しかし、Step5 では看護師としての「自分」と(日本の)「皆さん」と関係しながら、「新しい」「自信」を持ちながら主体的に取り組んでいた。日本人看護師の半構成的面接からは、「看護」の抽出語が Step2 では 0 であったが Step5 では 18 に増加していた。Step2 において日本人看護師の発言から強い結びつきが見られるネットワークは、記録や指示(受け)の業務に関連するものであり、Step5 では協働を捉える注目語である「自分」「仕事」「日本人」「看護」がネットワークの周囲に位置し、さまざまな語が構造化していた。

5. 考察

外国人看護師の看護技術実践では、来日後から生活援助技術に取り組んでおり、実施率は高かった。診療の補助技術は、母国における実践状況、および新卒日本人看護師の実践状況より低かった。外国人看護師にとって母国での生活援助は主に家族が行うため、診療の補助技術の実践が多かった。協働には外国人看護師の母国での看護実践状況を日本人看護師が知ることが重要である。協働プログラムにより、外国人看護師および日本人看護師ともに「看護」に対する認識が高まった。また日本人看護師は看護教育教材を視聴後に実施した話し合いが、外国人看護師の看護を知る機会となった。協働プログラムは教材活用によって外国人看護師の看護を知り、日本人看護師は外国人看護師の母国での看護実践状況を知る機会として活用できた。日本人看護師と外国人看護師が、互いの看護経験や看護実践について話し合うことで、協働関係構築への一歩となると考える。

6. 結論

- 1) 日本の国家資格を持つ外国人看護師は、母国では診療の補助技術の実践が多かったが、日本では生活援助技術が多く実施されていた。また、外国人看護師の実践は、生活援助技術および診療の補助技術ともに新卒日本人看護師よりも低かった。
- 2) 外国人看護師とともに働く日本人看護師は、外国人看護師がひとりで実施している看護技術の認識のずれがなく、外国人看護師の看護実践状況を正しく認識していた。

3) 外国人看護師および日本人看護師が協働プログラムとして合同で視聴覚教材を視聴し、話し合う場を持つことで、外国人看護師および日本人看護師は「看護」に対する認識が高まり、日本人看護師は外国人看護師の看護を知ることができた。EPA で来日した外国人看護師と日本人看護師の協働プログラムは、有効であった。

論文審査の結果の要旨

本研究は、経済連携協定（Economic Partnership Agreement、以下 EPA と略す）で来日した外国人看護師と共に働く日本人看護師の実態を基に、看護の目標を共有し、共に力を合わせて活動するための協働プログラムを検討したものである。

本研究の特徴は、研究対象が外国人看護師であることから、日本語をより理解しやすくするために質問紙調査の工夫を行い、丁寧な研究趣旨の説明に時間をかけたことである。さらに、研究者が試案した協働プログラムを導入する際に、外国人看護師と日本人看護師にそれぞれ実施した3回の面接調査においては、外国人看護師の日本語表現に誤解が生じない聞き取りをし、収集した膨大なデータをテキストマイニングにより客観的な分析に取り組んだことは大いに評価できる。本協働プログラムによる日本語の看護教育教材を共に視聴し意見交換をしたことは、外国人看護師の看護を知る貴重な機会となり、外国人看護師および日本人看護師ともに「看護」に対する認識が高まったことが明らかとなった。

本研究はわが国における EPA で来日した外国人看護師に対して、ほとんど取り組まれていない支援の研究であり、内容は評価できる。対象者が少なく限定されたものの、対象者の選定方法は妥当であり、外国人看護師と共に働く日本人看護師への支援について十分に検討されており、今後の外国人看護師と日本人看護師の協働プログラムの発展に寄与できるといえる。

審査において、研究概念の枠組みと協働プログラムとの整合性に矛盾が見られたため、本論の構成と用語表現の修正点を助言し、再提出された論文について審査委員全員が合格と判断した。

以上、結果から、審査委員全員は、本論文が博士（看護学）の学位を授与するに十分価値があるものと認めた。